犬の乳腺腫瘍

東京農工大学農学部家畜病理学教室出題　第17回獣医病理学研修会標本No.274

動物：犬，小型日本犬雑種，9才，雌，東京都内飼育。

臨床：国分寺市開業内田獣医師扱いの生検材料。右側第4および第5乳腺部に発生した挙大の腫瘍を，外科的に摘出し経過良好で退院したが，その後の連絡は取れていないとのことである。組織学的所見により，予後の不良が推察された。

肉眼的所見：小型犬のものとしてはかなり大きく，弾性があり，第4および第5乳頭が存在し，また，内股部脂肪組織が多量に付着している腫瘍塊である。表皮面には潰瘍性病変は全くなく，また割面でも化膿巣や壊死性病変は認められない。小嚢胞が散在する以外は，増生した梁状の灰白色結合組織内に，淡黄褐色の組織がほゞ平等に分布する一見良性の腫瘍である。しかし組織学的検索において，転移のある鼠径淋巴節が，同時に摘出されていることが見出された。

標本：ホルマリン固定。3枚とも別々の組織片より造られたものである。いづれにも乳頭が，またBとCには鼠径淋巴節がふくまれている。標本AはH-E, BはAldehyde fuchsinとTrichrome. CはAlcian blueとPASのそれぞれ重複染色である。

組織学的所見：肉眼的所見によく一致して，増生した結合組織により，区劃された乳腺小葉類似組織がほゞ平等に散在している。（写真1，H－E．ルーペ拡大）。正常な泌乳期乳腺，またはそれへの分化過程とは大部異なるものであり，WHOのRegular typical epithelial proliferation或は，AFIPのAtypical terminal duct hyperplasia等に相当する病変なのであろう。これらとは全く別に，厚く増生した結合組織いたるところに，大型の異型な上皮性細胞の浸潤増殖が認められる。一見癌巣と思える細胞集簇は，内皮や弁の存在により，すべてが淋巴管内において発育しているものであり，更に線維化をまねき，淋巴管が埋め立てられて行く過程が認められ，Intralymphangial carcinomaの像を呈している。（写真2．H－E．弱拡大）。これはWHOのAnaplastic carcinomaに一致するもので，すでに標本No.88において肺のBlastocytemia像と共に供覧した。

当日は時間切れのため，討議がなされなかったので，下記の診断は暫定的なものである。

病理学的診断：退行性癌および，それとの関連不明の異型性終末乳管増生症。